



HANDA CUP 第56回全日本プロボウリング選手権

12月9~11日 / 新狭山グランドボウル

お見事4タテ! 藤井信人が有終の全日本V



▲9年ぶり2度目の全日本制覇で大ブレイクのシーズンを締め切った藤井



2022年男子公式戦のフィナーレを飾る頂上決戦「第56回全日本プロボウリング選手権大会」は、3位で決勝ステップラダーに進出した藤井信人(52期・フリー/ハイ・スポーツ社)が再優勝決定戦を含む4タテを決め、初優勝を飾ったデビューイヤー(2013年)の第47回大会以来9年ぶり2度目の戴冠を果たした。藤井はこれが今季4勝・通算9勝目。大ブレイクのシーズンを最高のカタチで締めくくった。(主催: (公社)日本プロボウリング協会/一般社団法人国際スポーツ振興協会)

で初優勝をゲット。そのときも3位進出で、最後に待ち受けていた相手は川添奨太だった。川添にとっては、大会4連覇の偉業をルーキーに阻止された苦い記憶だ。

今回、川添は「練習ボールのときから難しく感じていた」右レーンスタートを選択。「左レーンでストライクを持ってきて、右はポケットをしっかりと突けたらいい」というゲームプランで臨んだが、結果はスタートから8連発を決めた藤井に完敗。川添が8フレからのオールウェーで再優勝決定戦に光明を見いだしたとき、「300は狙っていなかった」藤井はボールを替え、ライン取りも変えて試し投げする余裕?を見せていた。

「そうしたの、ストライクが止まったときに、次のアジャストの用意をしておかないと勝てない相手だから。再優勝決定戦も終盤、川添プロは全部ストライクを出すという想定



◀10フレ勝負となった3位決定戦、高田は1投目痛恨のワッシャーで敗退。「投げミスではなくて読み間違い。狙ったところに完璧に投げられた結果なので悔いはない」



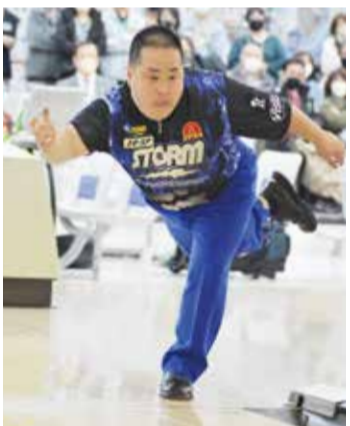
◀4位の斉藤征哉は9月以降これがかつて残った大会はあまり打たないが、最後まで諦めず粘り強く投げた結果が今回の4位にもつながったと思う

2022年の「勝負の神様」は、最後まで藤井の味方だった。

サムレス投法のレフティー・斉藤征哉との4位決定戦、藤井は1フレで⑩ピンをカバーミスするも「最初にミスしたからもう大丈夫」と動じず、終わってみれば4マーク近い差をつけて勝利。高田浩規との同期生対決となった3位決定戦はストライクが続かず苦戦し、10フレ勝負に持ち込まれたが、その1投目、完璧と思われた高田の

投球がまさかのワッシャーとなったのに対し、藤井は「内ミスして刺さると思ったら、曲がらずに10本倒れた(笑)」ラッキーストライク。そこで勝敗は決した。

優勝決定戦ではデジャヴな光景が現出する。デビューイヤーの2013年、藤井は第47回全日本プロ選手権の大舞台



▲川添は9年前の雪辱ならず、「最後に優勝を勝ちとれなかったのは悔しいけど、シーズンを通じて納得いくボウリングができなかったなかで、今回は多少自分のよさが出たかなとも思う。来年は逆襲の一年にしたい」



▲優勝決定戦の相手は9年前と同じ川添奨太。藤井は「きょうも緊張することなく、むしろワクワクしていた」という

で戦っていた。自分も準決勝で同じレーンに入ったときから右レーンに難しさを感じていたけど、練習ボールで『(外に)出し切れればいい』と分かって、ストライクが出なかったフレームもポケットはしっかり見えていたので、焦りとかはなかった」と藤井。その言葉どおり、再優勝決定戦はお互いのノームスの緊迫した展開となったが、目下の勢いにまさる藤井が233:208で勝利。大ブレイクしたデビュー10周年のメモリアルイヤーを、9年ぶり2度目の全日本制覇で鮮やかに締めく

くってみせた。

「これまで2位が多かったけど、これで(優勝決定戦の)勝率は5割くらいになったかも(笑)。来年も変わらず自分のボウリングをして楽しみたいと思うけど、普段お世話になっている石原章夫プロ(11期・ハイ・スポーツ社)の13勝には早く追いつき、追い越したいですね」

優勝ボール: フィジックス・パワーエリート・プロモデル、STORM(ハイ・スポーツ社)

●再優勝決定戦

川添 奨太									
20	40	60	80	100	119	139	159	179	208
9	8	8	8	8	8	8	8	8	8

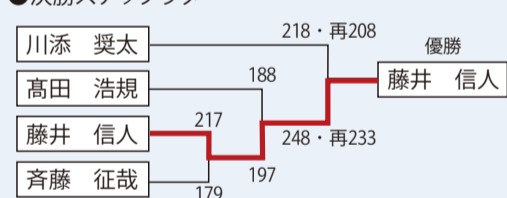
藤井 信人									
18	38	68	98	127	147	167	195	215	233
9	8	8	8	8	8	8	8	8	8

●優勝決定戦

藤井 信人									
30	60	90	120	150	180	206	222	228	248
9	8	8	8	8	8	8	8	8	8

川添 奨太									
5	3	2	3	2	3	2	3	2	3
8	28	48	68	88	108	128	158	188	218
9	8	8	8	8	8	8	8	8	8

●決勝ステップラダー



第43回 JLBCクイーンズオープンプリンスカップ

11月30日~12月3日 / 品川プリンスホテルBC

川崎由意が女子唯一の今季2勝目!



▲3年ぶり開催のプリンスカップを制し、女子では唯一の今季2勝目を挙げた川崎。来期も楽しみな存在だ

全日本プロ選手権の1週前、3年ぶりに開催された女子プロ公式戦「JLBCプリンスカップ」

は、会期中に29歳の誕生日を迎えた川崎由意(48期・アイキョーボウル/サンブリッジ)が大会初制覇を果たし、女子プロでは唯一の今季2勝目を挙げた。(主催: ジャパンレディスポウリングクラブ)

今大会の参加選手は総勢278名(プロ135名・アマ143名/アマ選抜大会含む)。川崎は8G1990(248.75Avg)と断トツのスコアで予選を勝ち上がり、決勝トーナメント(1~5回戦は2Gマッチ)では僅差の接戦をことごとく制する勝負強さを発揮して準決勝(シュートアウト1Gマッチ)に

駒を進めた。川崎、坂本かや、丹羽由香梨、大嶋有香の4名で争われた準決勝は、ベテラン丹羽がノームスの248でトップ。次位は5フレでも1ミスに犯した川崎と坂本の争いとなったが、8フレからのオールウェーで228の川崎に軍配が上がった。優勝決定戦(1Gマッチ)は予想外のワンサイドゲームとなった。準決勝から一転「コンディションが変わったのを分かっていて対処できなかった」と、前半で3つのスプリットオープンと大崩れた丹羽を尻目に、川崎はノームスの237で悠々のVゴールを切った。

「4年前のプリンスカップで、初めて公認の300を出して予選を1位通過したときは、トーナメントの最初の試合で相手のプロにボコボコにされた記憶があるので、きょうは目の前のゲームだけに集中して投げていました。運も味方してくれて、全部いいほうに転んでくれた。昨日(12月2日)が誕生日。29歳になっていきなり優勝できてうれしいです」と川崎。

5月のグリコセブンティーンアイス杯以来の勝利は、今季の女子では唯一の複数回優勝。通算勝利数も久保田彩花と並ぶ同期トップタイの4勝とした川崎は、来季も“女王”姫路麗を脅かす存在の

ひとりとなりそうだ。優勝ボール: BRUNSWICKソディアック・アクエリアス(サンブリッジ)、DVBヘルキャット(サンブリッジ)



▲ベストアマの太琳華選手は沖繩・トーナメント5回戦まで勝ち進み、総合6位でフィニッシュ

●準決勝シュートアウト・決勝(1Gマッチ)

